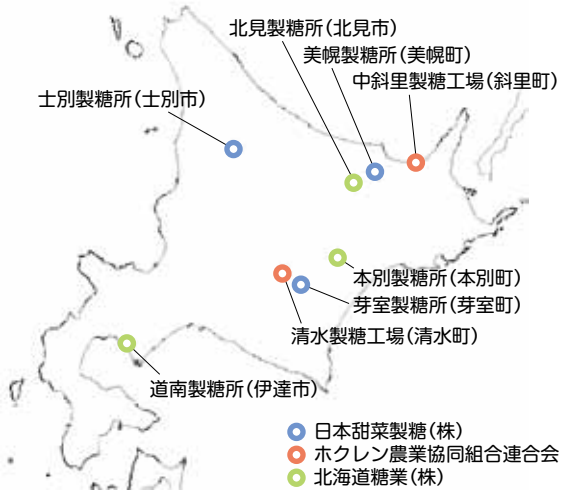
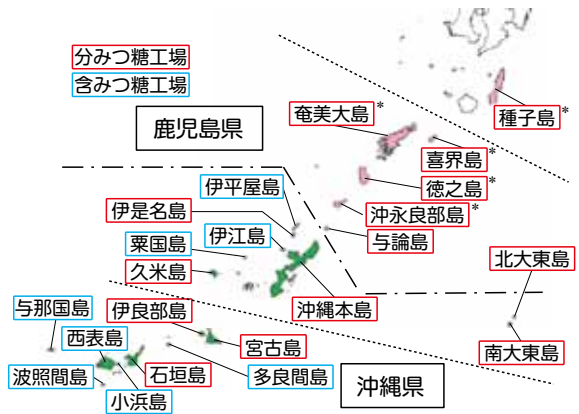


図2-4-18 北海道における製糖工場の分布



資料：農林水産省作成

図2-4-19 鹿児島県、沖縄県における甘しゅ糖工場(分みつ糖、含みつ糖)が所在する島



資料：農林水産省作成

注：*種子島、奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島には含みつ糖の小型工場も所在。

このような中、生産の安定化に向けて、てんさいでは、褐斑病^{かつぱんびょう}や黒根病^{くろねびょう}等に高い耐病性を備え、糖の含有量が多い品種の育成が進められており、これらの品種の普及に加えて、労働力不足に対応した直播栽培^{ちよくは}の生産安定化技術の開発・普及等が期待されています。

一方、さとうきびでは、奄美群島向けの早期高糖・多収品種「農林30号」や宮古島向けの太茎・黒穂病抵抗性品種「農林31号」等、島しょごとの気候風土を踏まえた品種が開発されているほか、交信かく乱用フェロモン剤による害虫防除等の技術の活用が進められています。

(9) いも類

(ばれいしょの生産量は増加、かんしょは減少)

ばれいしょの作付面積は、生産に長い労働時間を要するため他作物への転換や、生産者の高齢化に伴う作付中止等により減少傾向にありましたが、平成24(2012)年産は、8万1千haで前年産から横ばいとなっています¹。生産量については、近年、春先の低温・多雨による初期生育の遅れや夏季の高温による塊茎肥大^{かいけい}の抑制等がみられましたが、平成24(2012)年産は、前年産に比べ5%(11万t)増加し250万tとなりました。

かんしょの作付面積は、生産者の高齢化に伴う作付中止等から、微減傾向にあり、平成24(2012)年産は、3万9千haとなっています²。平成24(2012)年産における生産量は、主産地の鹿児島県における挿苗期^{そうびょう}の低温と、それに続く日照不足等の影響により生育が抑制されたため、前年産に比べ1%(1万t)減少し88万tとなりました。

(ばれいしょの病害虫抵抗性品種の導入促進)

ばれいしょについては、一度発生すると防除が困難で、収量を半減させるジャガイモシストセンチュウ等の難防除病害虫の発生拡大への対応が課題となっています。

主産地の北海道におけるジャガイモシストセンチュウの発生は、平成24(2012)年度までに、道内の49市町村、総面積で約1万haに拡大しています(図2-4-20)。

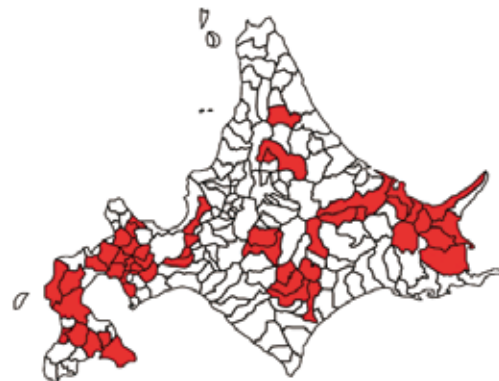
1 農林水産省「野菜生産出荷統計」

2 農林水産省「作物統計」

ジャガイモシストセンチュウへの対策としては、シストセンチュウ抵抗性品種の導入が最も効果が高いとされているものの、平成24(2012)年度における、その導入面積は全作付けの2割にとどまっています。

このため、農林水産省では、「新品种・新技術の開発・保護・普及の方針」の中で、抵抗性品種の導入割合を今後10年間で50%にすることを目標としています。

図2-4-20 ジャガイモシストセンチュウ発生市町村 (平成24(2012)年度)



資料：北海道調べ

(でん粉用と焼酎用かんしょが大きく競合)

かんしょは、生食用や加工食品用のほか、でん粉やアルコール(焼酎)の原料として利用されています。かんしょの用途別仕向量は、平成24(2012)年産では、生食用が42万8千tと全体の49%を占め、アルコール用は20万4千t(23%)、でん粉用は13万1千t(15%)となっています(表2-4-3)。

平成24(2012)年産は、いも焼酎製造業者の生産能力の強化に伴い、いも焼酎用の需要が増加した一方で、天候不順により南九州でのかんしょ生産量が減少したため、でん粉用と焼酎用が競合し、かんしょでん粉生産量は過去最低の3万8千tとなりました¹。

今後、需要に見合った用途ごとのかんしょの生産を実現するため、^{けいちようばいようなえ}茎頂培養苗などの優良種苗による単収向上の取組等が課題となっています。

表2-4-3 かんしょの用途別仕向量の推移

(単位：万t)

	平成2 年産 (1990)	12 (2000)	17 (2005)	22 (2010)	23 (2011)	24 (2012)
合計	140.2	107.3	105.3	86.4	88.6	87.6
生食用	62.0	57.0	51.2	39.8	41.9	42.8
飼料用	8.4	4.4	1.3	0.3	0.3	0.3
種子用	5.3	3.2	1.7	1.2	1.5	1.3
加工食品用	7.3	10.7	9.4	7.9	9.3	8.2
でん粉用	43.0	21.4	18.4	15.0	15.3	13.1
アルコール用	7.3	7.0	20.8	19.8	18.9	20.4
減耗	6.9	3.6	2.5	2.3	1.4	1.5

資料：農林水産省調べ

注：1) 平成24(2012)年産の値は概算値。

2) アルコール用は、焼酎用、醸造用等の計。

(10) 畜産物

(大規模化が進展、乳用牛・肉用牛は生産基盤の維持が課題)

平成25(2013)年の主要畜種の飼養戸数は10年前の平成15(2003)年と比べると、全ての畜種において減少しています。特に乳用牛(都府県)、肉用牛(子取り用めす牛)、豚、採卵鶏では4割程度減少しています(表2-4-4)。

また、飼養頭羽数は、乳用牛(都府県)で3割減少していますが、肉用牛(肥育用牛)で1割、ブロイラーで3割増加しています。

このような中、1戸当たりの飼養頭羽数は、全ての畜種で増加しており、大規模な経営体に生産の集積が進んでいます。特に、豚、ブロイラー、採卵鶏については、他畜種に比べ大規模経営体が占める割合が高くなっています。

¹ 農林水産省調べ